

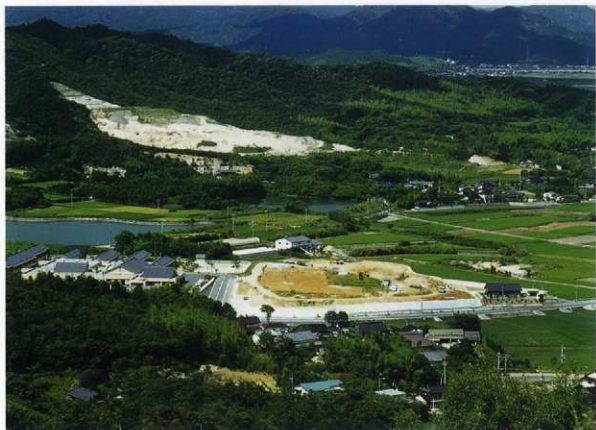
な 　 　 　 つ 　 　 　 ば ら 　 　 　 い 　 　 　 せ き

中 津 原 遺 跡

—特別養護老人ホーム造成工事に伴う発掘調査報告—

2 0 0 0

秋 穂 町  
財団法人 山口県教育財団  
山口県埋蔵文化財センター



中津原遺跡遠景（善城寺山より）



石匙



翼状剥片

## 序

秋穂町は、特別養護老人ホーム造成工事に伴い、町教育委員会及び山口県教育委員会と協議し、その造成地内にある遺跡について、財団法人山口県教育財団に委託して記録保存のための発掘調査を実施しました。秋穂町におけるこうした大規模な発掘調査は、過去において例を見ないものであります。

中津原遺跡は、秋穂町のほぼ中央部に位置する江戸時代を中心とする集落跡で、掘立柱建物跡や土坑・溝など多数の遺構が確認されただけでなく、時代を遙かにさかのぼる旧石器時代や縄文時代の遺物も発見されました。これらの資料は、秋穂町の先史を解明する上で貴重な資料であり、これからの豊かな郷土造りに大きく役立つものです。

本書は、中津原遺跡の発掘調査の記録であり、これが、秋穂町民はもとより、多くのみなさんの埋蔵文化財への認識と理解を深めるとともに、学術・教育のために広く活用されることを期待するものであります。

最後に、中津原遺跡発掘調査及びこの報告書編集を委託しました財団法人山口県教育財団をはじめとする関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成12年3月

山口県吉敷郡秋穂町

秋穂町長 藤生 通陽

## 序

本書は、特別養護老人ホーム造成工事に伴い、秋穂町の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した中津原遺跡の発掘調査の記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、目前に迫った21世紀を、明るく、うるおいと活力に充ちた時代に創造していく上において、欠くことのできないものです。また、これらの文化財を損なうことなく未来に伝えていくことは、今の私たちに与えられた課題であるともいえます。

当教育財団では、埋蔵文化財保護の立場から、基本的には遺跡の現状保存策を採り、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたびも、特別養護老人ホーム造成工事に先立ち関係諸機関と協議、調整を行いました。工事によって遺跡の失われる範囲について、発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、江戸時代の遺構が確認されたほか、旧石器時代・縄文時代・弥生時代そして中世の遺物も発見されました。これらの資料は、秋穂町の歴史に新しい事実を加える大変貴重なものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願います。

おわりに、調査の実施に当たって御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 山口県教育財団  
理事長 牛見 正彦

## 例 言

- 1 本書は、山口県吉敷郡秋穂町東字中津原に所在する中津原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、特別養護老人ホーム造成工事に伴い、財団法人山口県教育財団が秋穂町の委託を受け実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。  
調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター  
調査担当 指導主事 大村 秀 典  
指導主事 福本 和 久
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、秋穂町、秋穂町教育委員会、秋穂町中央公民館並びに地元関係各位の協力を得た。
- 5 本書に掲載した第1図の地形図は、秋穂町提供の25000分の1の地形図「秋穂町全図」を複製したものである。また、第2図の調査区設定図は秋穂町提供の「秋穂町平面図7」を複製し、第3図のトレンチ設定図は同じく秋穂町提供の「特別養護老人ホーム造成工事開発区区域図・現況図」をもとに作成した。
- 6 本書に使用した方位は国土地標（第3座標系）の北で示し、標高は海拔標高である。
- 7 出土遺物のうち、旧石器については山口県史編さん室専門研究員河村吉行氏に御教示をいただき、他の石製品の石質鑑定は山口県立山口博物館専門学芸員亀谷敦氏に依頼した。なお、石質鑑定は表面観察によるものである。
- 8 遺構の埋土および遺跡地内の地山土の分析については、吉敷郡小郡町立小郡中学校長松尾征二氏に依頼し、指導助言を得た。
- 9 本書に使用した土色の色調の標記は、Munsell方式による。（農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」）
- 10 本書の遺構略号は、次のとおりである。  
SB：建物跡 SK：土坑 SD：溝状遺構 SE：水溜遺構 SX：用途不明遺構
- 11 本書の実測図・写真の製作及び本書の執筆・編集は、大村・福本が共同で行った。

# 本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯と調査の概要	2
III 遺構	
1. 建物跡	13
2. 土坑	19
3. 溝と水溜遺構	22
4. その他	22
IV 遺物	24
V まとめ	26
付編 吉敷郡秋穂町出土の製塩土器について	28

# 図版目次

図版1	中津原遺跡遠景(南より)	中津原遺跡全景
図版2	調査前風景(西より)	調査前風景(南より)
図版3	I地区調査後全景	II地区調査後全景(北東より)
図版4	SB101全景(南東より)	SB102全景(東より)
図版5	SB103全景(南より)	SB104全景(東より)
図版6	SB105全景(東より)	SB106全景(南より)
図版7	SB107全景(南東より)	SB107南隅礎石検出状況(南西より)
図版8	SB201全景(南東より)	SB202全景(東より)
図版9	SB203全景(南より)	SB204全景(北西より)
図版10	SB205全景(北西より)	SK101完掘(東より)
図版11	SK119完掘(東より)	SK125完掘(南西より)
図版12	SK155完掘(南東より)	
	SD102(上)・SD103(下)とSE101(南西より)	
図版13	SE101完掘(東より)	SE102遺構検出状況(南東より)
図版14	SE102完掘(南東より)	SX101・SX102完掘(北西より)
図版15	SX101完掘(北西より)	SX102完掘(北西より)
図版16	SK101石匙出土状況(北より)	SK119翼状刺片出土状況(東より)

- 図版17 SD103遺物出土状況（南東より） SD103 土錘出土状況（南東より）  
 図版18 出土遺物①  
 図版19 出土遺物②  
 図版20 秋穂町内出土の製塩土器

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	調査区設定図	7・8
第3図	トレンチ設定図	10
第4図	遺構配置図	11・12
第5図	SB101実測図	13
第6図	SB102実測図	14
第7図	SB103実測図	14
第8図	SB104実測図	15
第9図	SB105実測図	15
第10図	SB106実測図	16
第11図	SB107実測図	16
第12図	SB201実測図	17
第13図	SB202実測図	17
第14図	SB203実測図	18
第15図	SB204実測図	18
第16図	SB205実測図	19
第17図	土坑実測図	20
第18図	SE101・SE102実測図	22
第19図	SX101・SX102実測図	23
第20図	出土遺物実測図①	24
第21図	出土遺物実測図②	25
第22図	出土遺物実測図③	25
第23図	秋穂町出土製塩土器実測図	28

## 表 目 次

第1表	土坑一覧表	21
第2表	秋穂町出土製塩土器の脚柱高と脚底形状・脚底径	27
第3表	秋穂町出土製塩土器観察表	29





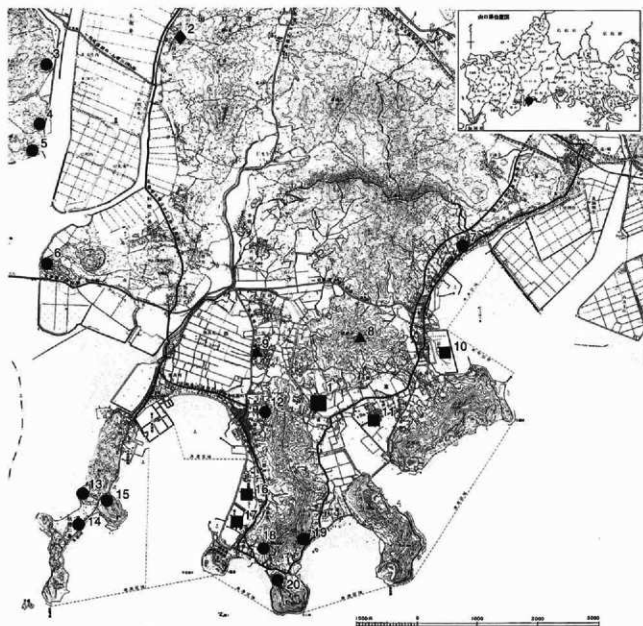
調査に参加していただいた作業員の方々（順不同・敬称略）

三好歌子 福江沙織 徳万公亮 岡本國子 舛田隆彦 福田美恵子 森王洋子 小野サトヨ  
大塚敏正 道中清子 道中十三 道中タカコ 安井孝子 福江太代美 西岡良子 石田芳朗  
上田林一 吉松晋一 小川公代 小川陽一郎 小林順子 吉岡孝也 城島広子 岡田玲子  
佐々木信子 吉岡正 吉岡昌代 山田陽子 小林善也 山本陽子 長岡千春

## I 遺跡の位置と環境

中津原遺跡は、吉敷郡秋徳町東字中津原に所在する。

秋徳町は、山口県の南部、瀬戸内側のほぼ中央、吉敷郡の東端に位置する。南は周防灘に望み、東は大海湾を隔てて防府市西浦に対し、西は山口市秋徳二島の一部を隔てて小郡湾に接し、北は山口市秋徳二島と鏡鏡司及び防府市台道に接している。町の最高峰は北境の四方に尾根を広げる大海山(324.6m)で、その南側に伸びる尾根とそれに続く経納山、串山連峰、笠倉山が、ちょうど秋徳町



- |           |          |          |           |           |
|-----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 1 中津原遺跡   | 2 向山遺跡   | 3 浦辺古墳群  | 4 大浦古墳群   | 5 梅ヶ崎古墳群  |
| 6 幸崎古墳群   | 7 大河内遺跡  | 8 経ノ辻経塚  | 9 中野遺跡    | 10 大海塩田跡  |
| 11 青江塩田跡  | 12 下村古墳  | 13 兜山古墳群 | 14 美濃ヶ浜遺跡 | 15 揺木山古墳群 |
| 16 中津江塩田跡 | 17 花香塩田跡 | 18 尻川古墳  | 19 中道古墳群  | 20 笠倉古墳   |
- ◆…………縄文    ●…………古墳    ▲…………中世    ■…………近世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

を東西に二分する形になっている。

地形的な特徴としては、第一に、秋穂町内には黒濁に代表される近世以降の大規模な干拓地を除いて、低地が乏しいことがあげられる。これは、秋穂町全体を見たときに、海岸線から一番離れたところでも5 km以内であり、西部には長沢川や支流の天田川などもあるが、東部には川らしい川が見あたらず、沖積低地の形成が行われなかったことが理由である。もちろん、大海山を中心とする山地や小山塊の間と南側の海岸沿いには、若干の低地や台地が形成されているが、町の総面積に占める割合はわずかといってよい。

もう一つの特徴は、宮ノ且、中野、下村、西天田、青江、金山領など町内の各所で見られる、低地よりも一段と高く、低地と急崖で接する台地の存在である。これらの台地の上には何段かの平坦面があり、全体として階段状の地形をしている。この段丘は、海食と海底堆積によってできた地形が、海面低下（土地の隆起）によって現れた海岸段丘と言われるものである。秋穂町では三段の段丘が認められており、それぞれ上位から仁光寺面・宮ノ且面・中野面と呼ばれている。今回調査をした中津原遺跡も、経納山の南側の裾野にある小さい張り出しの台地で、宮ノ且面（標高11～15m）から中野面（標高5～8m）へと続く海岸段丘上に位置している。しかしながら、この場所一帯では、二つの段丘面ははっきりした段丘崖を形成せず、緩やかに移り変わっており、遺跡のある場所の標高は9～11m前後であった。

一方、地質的に見ると、遺跡の立地する場所の下位の地層は、秋穂層と呼ばれる第四系洪積層であるが、その上部には全体的に赤褐色の砂質粘土層が広がっている。粘土化が進んでおり、一見すると



中津原遺跡（北東から）

赤土のように見えるものの、土の成分として火山灰の堆積土を含んでいる。これは、山口県中央部では一般的に見られる宇部火山灰層に対比されるもので、今から7～8万年前頃に噴出した阿蘇火砕流（Aso-4火砕流）が堆積したものである。さらに、地表面近くでは、始良Tn火山灰（今から約2.2～2.1万年前に噴出）や鬼界アカホヤ火山灰（今から約6300年前に噴出）に由来する鉱物や火山ガラスも確認されており、中津原遺跡一帯の地山は火山灰の堆積土であることはほぼ間違いのないものと思われる。

これまで述べたとおり、低地に乏しく、海に突出した秋穂町の自然や立地条件から見たとき、古くからこの地で生活した人たちは、経済的基盤の上では海と密接に関係のある生活をしてきたことは想像に難くない。その証拠に、町内において最初に生活の痕跡が伺える旧石器が発見された丸山遺跡を始めとして、赤石遺跡、笹倉遺跡などの縄文時代までの遺物散布地は確認されているものの、弥生時代や古墳時代の稲作関連の集落遺跡は確認例がなく、遺物の発見例も極めて少ない。今回の中津原遺跡の調査に当たっても、昨年度の子察調査では弥生土器片が確認されたが、調査の結果、残念ながら同時期の遺構は確認できなかった。

むしろ、同時代の生活の手掛かりとしては古墳時代の製塩土器が出土した大河内遺跡がその代表であるといつてよい。金メッキされた耳環と共に高杯・玉類が出土した笹倉古墳や、既に大部分が崩れ落ち石室の一部が露呈しているにすぎない中道1・2号墳や尻川古墳も、その背景となる集団については、製塩関係もしくは海上交通との関わりを考える方が自然と言えるであろう。

中世においては、中野遺跡で甕型土器の口縁部や足錫の脚部など土師質の土器片や瓦質土器片がいくつか出土しており、その付近に中世の村落が存在していたと推測できる。しかしながら、すでに述べたように、町内には川らしいものはほとんどなく、太古の時代か



中道1号墳



笹倉古墳出土高杯



秋穂町出土の製塩土器

ら生活に必要な水の確保が難しく、特に当遺跡のある東地区は、まとまった集落が営まれていた可能性は薄いと考えられる。

しかし、近世になると、水不足を補うため人々は溜め池をつくるようになり、天保十一年（1840）の記録によると秋穂本郷側に百十カ所、大海側に三カ所の溜め池があり、灌漑用に利用し、田畑を潤したと記されている。中でも大規模なものとしては、天田の外屋堤と中野の黒石堤が代表としてあげられる。外屋堤は、慶安年間（1648～52）当時の小郡宰判代官東条九郎右衛門の指示で、秋穂の庄屋（安光）茂兵衛と二島の庄屋（小野）利兵衛が担当し、亀尾山系の雨水を蓄え、両天田・中野・黒潟の開作を潤した。一方、同じく東条九郎右衛門の代官時代に安光茂兵衛の尽力で築堤された黒石堤は、経納山系の雨水を蓄え、中野・下村・青江の水田を潤した。こちらは、中野や下村の比較的高地の田畑をも灌漑するため、その水路の勾配を緩やかにするなど苦労しているが、それでも近隣の水田は干害を受けやすく、その後、高地の田畑では、井戸や溜め池を設置し対応してきた。

ところで、東条九郎右衛門の備近として幾度かの築堤に努力し、町内各所の水田化に人力を尽くした安光茂兵衛は、その後庄屋を二男に譲り隠居して、西青江（中津原遺跡の近辺）に移り住んだとされている。その意味では、この遺跡も当時の安光家に関わる可能性を含んでいると言うことができよう。



安光茂兵衛の墓



満々と水をたたえる黒石堤

#### 参考文献

- 秋穂町 『秋穂町史』 1982  
山口県教育委員会 『生産遺跡分布調査報告書—製塩—』 1984  
小川固治 『山口県の歴史』 山川出版社 1998  
下中邦彦 『山口県の地名』 平凡社 1980  
松尾征二 『吉南地域東部の更新統』（『岡本義彦先生退官記念誌』 1982）  
小野忠照 『第四紀の宇部の海岸地形』  
（宇部市教育委員会他『宇部の遺跡—宇部市域遺跡群学術調査報告—』 1968）

## II 調査に至る経緯と調査の概要

### 1 調査に至る経緯

秋穂町では、養護老人ホーム「秋楽園」に続き、老人福祉の中核施設としてその隣接地に特別養護老人ホームの建設を計画し、建設予定地内の埋蔵文化財の有無について山口県教育委員会に調査を依頼した。平成10年の予察調査の結果、柱穴や土坑などの遺構や弥生土器、土師器などの遺物が検出され、弥生時代～中世の集落跡の存在が予想されたことから、山口県教育委員会と山口県吉敷郡秋穂町教育委員会が協議の結果、平成11年度に建設工事予定地内の丘陵上において、施工に先立つ発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成11年4月中旬から5カ月間とし、発掘調査対象面積は、4000㎡と決定した。

### 2 調査の概要

平成11年4月当初より事前の諸準備を開始し、4月7日現地にて秋穂町教育委員会担当者と造成工事担当業者立ち会いのもとに事前協議を行い、調査区の範囲等について協議・確認した。その結果、「秋楽園」寄りの3000㎡を超える調査区（Ⅰ地区）から約30m余り南東に離れて位置する300㎡あまりの調査区（Ⅱ地区）については、まず遊水池を作るという造成工事の進行上、調査を早めに終了することとなった。発掘器材等の準備を終え、4月19日に現地発掘調査事務所を設置。当日の午後、作業員の事前説明会を開き、本格的な発掘調査は翌20日から開始した。

調査にあたっては、まず地層と遺構の広がり詳細に把握するためトレンチを計17本設定し、人力により掘り下げた。秋穂町での本格的な発掘調査は今回が初めてということもあり、作業員全員が未経験者で、作業の仕方や道具の使い方など当初はぎこちない面も見られたが、真剣な取り組みにより日に日にぎこちなさも解消していき、トレンチの掘り込みも順調に進行した。トレンチ調査の結果、調査区全域にわたり遺構を確認することができた。トレンチの土層観察による当地の層序は、厚さ30cm程度の耕土直下に赤褐色砂質粘質土の地山が認められ、部分的に耕土と地山の間に客土が確認できた。



作業説明



トレンチ調査

が遺物包含層は確認できなかった。

以上の結果をもとに、4月26日にⅡ地区から重機による表土除去を開始し、それと並行して人力により遺構を検出していった。表土除去は、28日からはⅠ地区にも移り、重機も計3台が稼働し作業効率も格段と上がった。その中で、Ⅰ地区では、表土除去作業中に東端の堆積土中より石垣の石を転用したと思われる3つの礎石の石が検出された。

表土除去とそれに続く遺構検出作業が終わった後、平板による1/100の遺構配置図を作成。そして、5月17日からいよいよ遺構の掘り込み作業に入ることとなったが、前述したとおりの工事進行の都合で、まずⅡ地区から掘り込みを行った。折しも、五月晴れの好天が続き、遺構面が固く乾き、掘り込みが大変困難な状態になったため、遺構面上に十分散水し、シートで覆い水の蒸発を防ぎながらの作業が続いた。

そうした中で、遺構の掘り込み作業と平行して、随時、写真撮影・遺構実測等を進め、6月2日、全体写真を撮影しⅡ地区の調査を予定通り終了することができた。Ⅱ地区は、6月9日から本格的な工事に入り、瞬く間に調査区の約半分の面積が消滅してしまった。発掘調査の苦勞を思うと、少なからず残念に思えた。

一方、5月20日からⅡ地区と並行して一部進められていたⅠ地区の掘り込みも、6月4日から作業員全員が参加して本格的に始まり、土坑や溝状遺構の掘り込みが進められた。Ⅱ地区では、残念ながらあまり遺物が検出されなかったが、Ⅰ地区の溝状遺構では土師器や陶磁器の破片がいくつか検出され、遺物と向かい合う作業員の顔から窺える、これぞ発掘！という満足げな笑顔が、まことに印象的であった。

梅雨に入り天気を心配したが、前半は好天に恵まれ、掘り込みは順調に進んだが、一方で作業員の健康管理には十分配慮しながら調



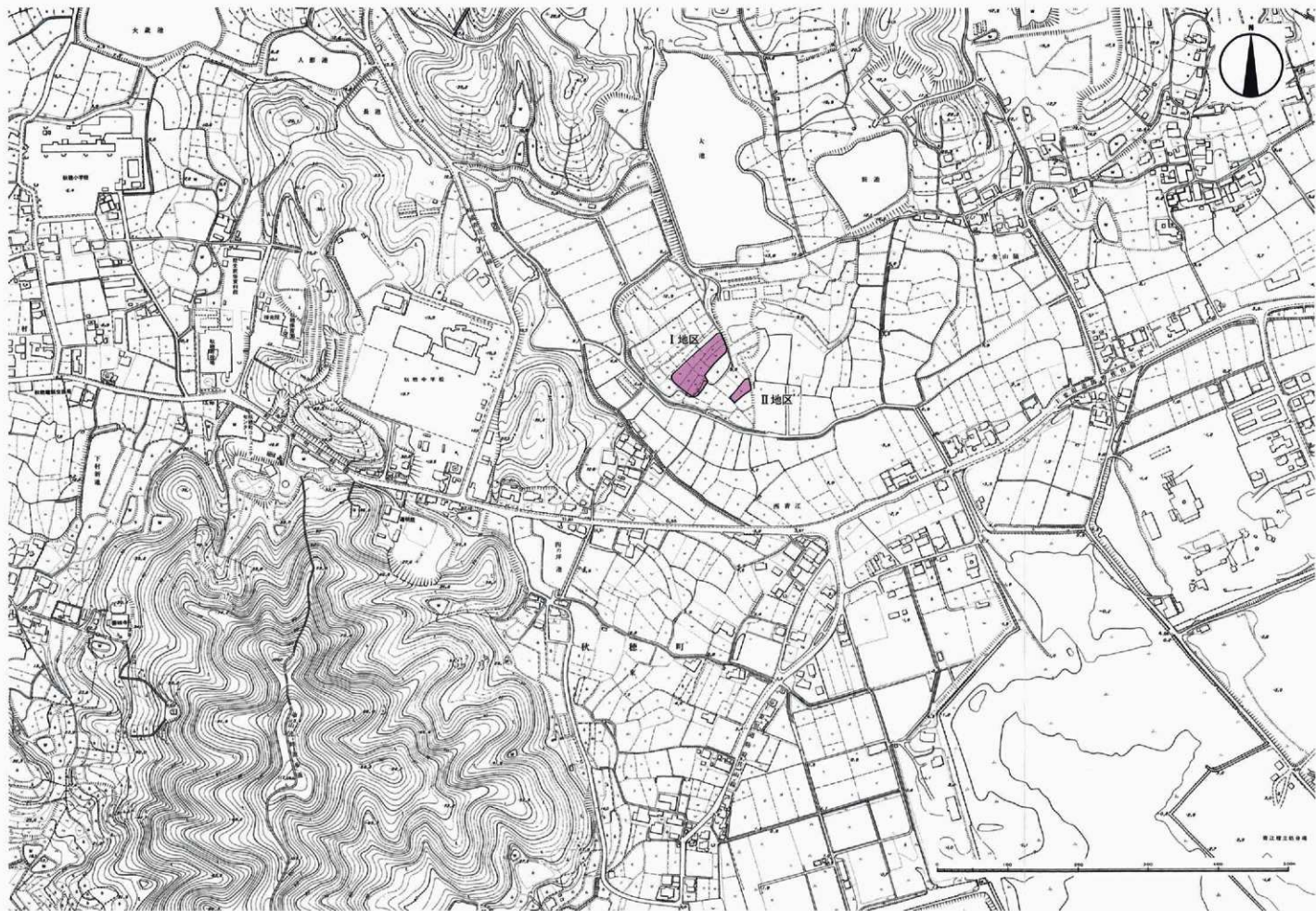
重機による表土除去



遺構検出



猛暑の中での平板実測



第2図 調査区設定図



査に臨んだ。そのような中、6月9日、土坑から縄文時代の石匙が見つかった。さっそく作業員に集まってもらい、石器について縄文時代の人々の生活の様子についての説明の時間を設けることができ、そのことが作業員の今後の作業への意欲付けにもなった。さらに、続いて6月15日には、調査区南側の土坑から旧石器時代の翼状剥片も検出され、約2万年前という石器の時期に作業員の驚きもひとしおであった。翼状剥片が出土した週末の19日には、雨にもかかわらず、地元「秋穂町ふるさと探訪の会」のグループ総勢約20名の方々が遺跡の見学にいられた。遺構や珍しい遺物の説明に真剣に耳を傾けられ、地元の方々の発掘調査への関心の高さを改めて感じた。

順調に進んでいた作業も雨には勝てず、6月23日から1週間作業ができなかった。その間、集中豪雨で他県では尊い人命が失われるという悲しい出来事もあったが、当遺跡や遺跡周辺では被害らしい被害もなく胸を撫で下ろした。しかし、この雨による作業の遅れに対して、先行して工事に入った遊水池以外の工事予定区についても建設工事の着工時期が早まることとなり、秋穂町や工事担当業者との再協議の結果、調査終了予定が7月末と決まり、一層調査が急がれることとなった。

幸い、その後は好天に恵まれ、7月6日からは当センター職員の応援を受け、掘り込みの終了したところからI地区の1/20グリッド実測に入った。さらに、これと並行し大型の土坑SK130や水溜遺構などの掘り込みを行い、個別遺構の写真撮影など悪天候でできなかった作業も無事終えることができた。7月9日には全ての掘り込みを終了。グリッド実測も7月14日をもって終了した。

引き続きI地区全体の清掃作業を実施し、7月23日の空中写真撮影に備えた。実施前夜、激しい雨に見舞われ、実施が危ぶまれた。当日も薄曇りの中、一部調査区内には水溜りがあり、絶好の条件とは言えなかったが、調査の終了期限も迫っていることから撮影決行を決断した。

空撮も無事終了したことで、現地での残務整理に取りかかり、7月30日には、町教育委員会に現地調査の終了の報告を行うとともに、現地での全ての調査を終了した。

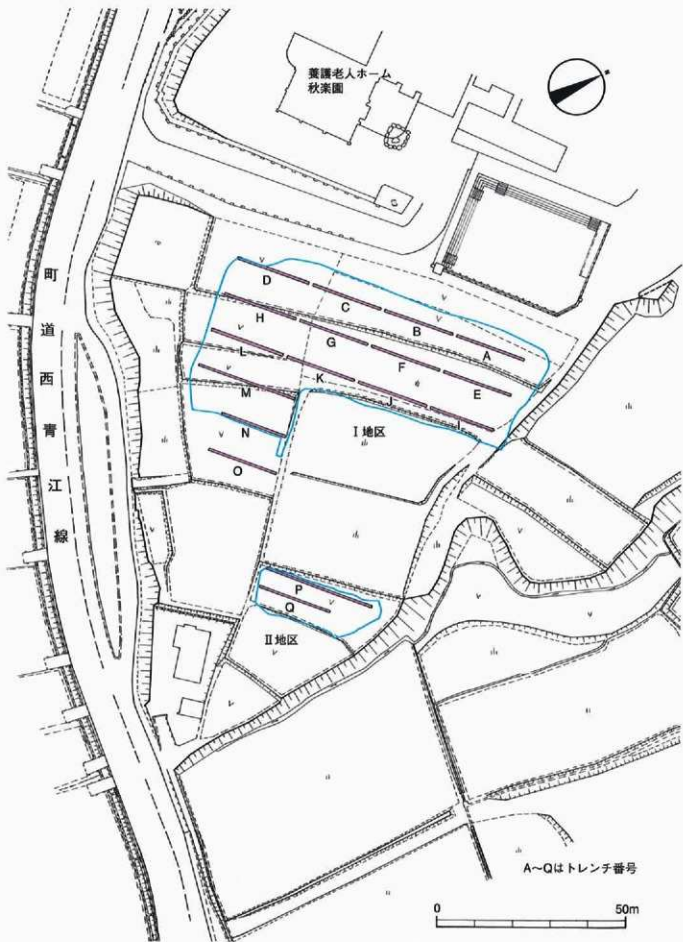
なお、調査に際しては、町民の方々に様々な場面で多大な御協力をいただき、心から感謝している。



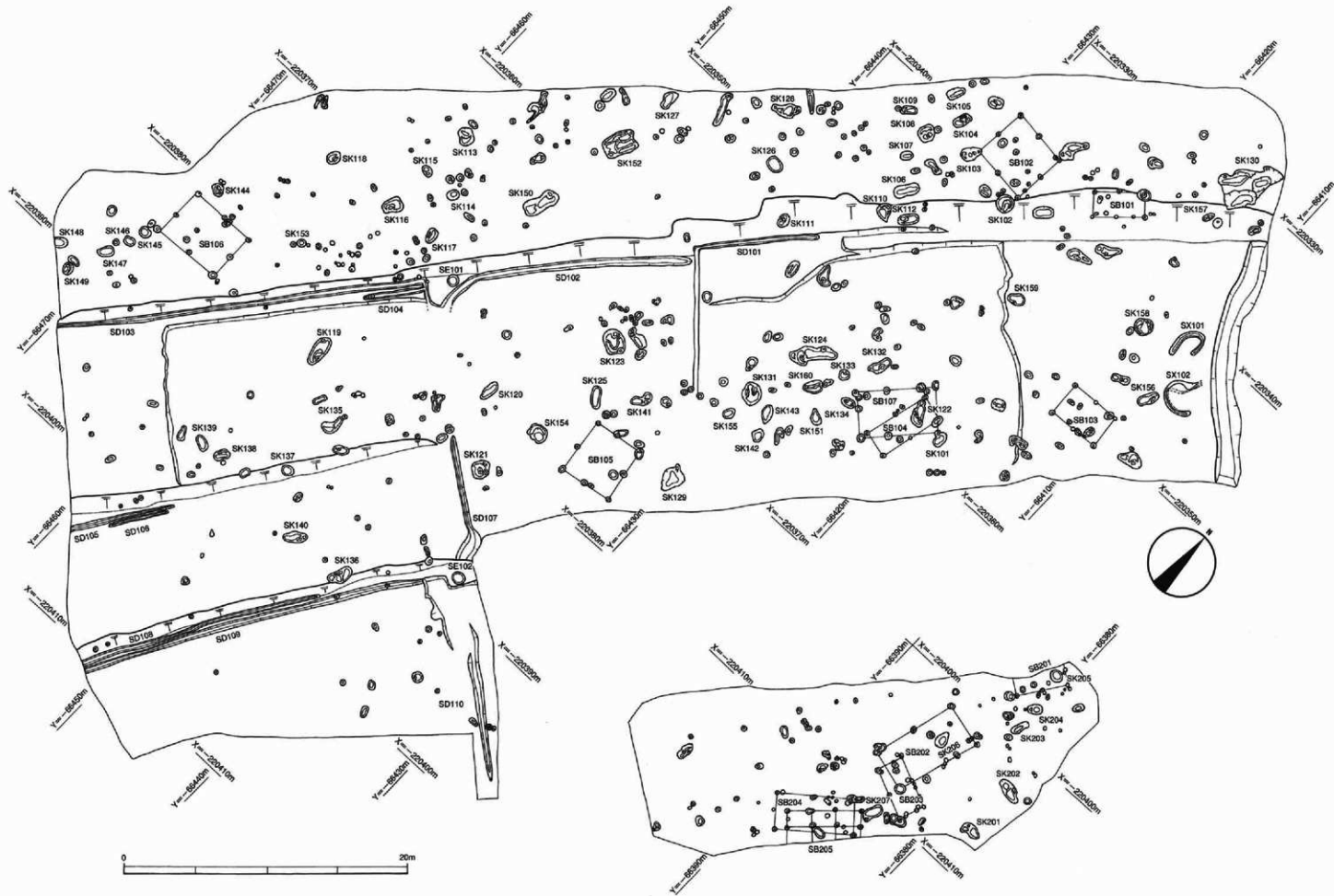
遺構の掘り込み



空中写真撮影



第3図 トレンチ設定図



第4図 遺構配置図

### Ⅲ 遺 構

遺跡の位置と環境でも述べたとおり、中津原遺跡一帯の標高10m前後の海岸段丘は、今からおよそ13～11万年前頃にあたる、リス・ウルム間氷期の地球温暖化の時期に海底堆積した、いわゆる秋穂層と呼ばれる砂礫層を基盤としている。そして、現在の地山は、基盤の砂礫層上に、阿蘇火砕流や始良アカホヤ火山灰、さらに鬼界アカホヤ火山灰等が再堆積したものである。一方、秋穂層及びその上部の火山灰の再堆積土は、風化作用と粘土化の結果、赤褐色の粘質土に変わっており、調査区一帯の地山も、再堆積土の種類の違いや風化の度合いの違いにより若干の土色の差はあるものの、基本的には鮮やかな赤褐色粘質土の様相を呈していた。遺構は、その赤褐色粘質土に掘り込まれており、遺構の埋土は、褐色粘質土・黄褐色粘質土・橙色粘質土さらに黒褐色土が中心だった。

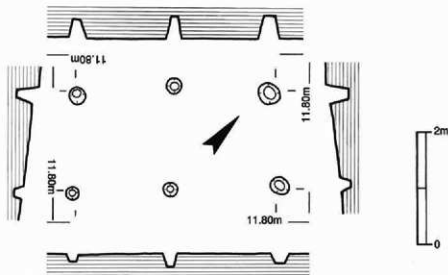
検出された遺構は、調査面積約3100㎡のⅠ地区においては、柱穴多数の他、掘立柱建物6棟、礎石3石、溝10条、土坑60基、水溜遺構2基などがあり、調査面積約300㎡のⅡ地区では、柱穴の他、掘立柱建物5棟、土坑7基などがある。出土遺物は約2万年前の旧石器から近世の陶磁器までと多岐にわたるが、遺跡の位置する段丘一帯は、近世初頭の段階で畑にするために大規模な開墾と削平が行われたと見られ、近世以前の遺構については、はっきりと時期の確定をしようものななかった。

以下、それぞれの遺構についてその概要を記す。

#### 1. 建物跡（第5～16図）

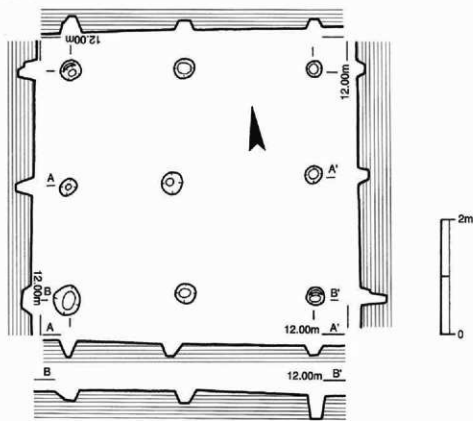
調査区内からは、粗密の差はありながらも、多数の柱穴と見られる小ピットが検出された。これらは、その多くが、本来的には掘立柱の建物を構成していたものとみられるが、明確に建物として復元し得る例は少ない。さらに、時期を確定するために必要となる出土遺物も、極めて少なかった。

SB101 Ⅰ地区の北東側に位置する身舎2間×1間の建物である。Ⅰ地区の他の5棟の掘立柱建物の棟方向とは異なり、後述のSB107とこの建物は、Ⅱ地区のSB201などと同じく棟方向が南西から北東方向となる。桁行長3.5m、梁行長1.8m、桁方向の柱間距離は1.8mを測る。



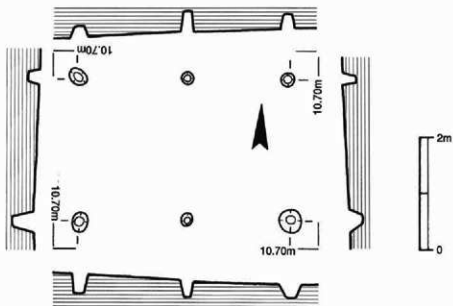
第5図 SB101実測図

SB102 SB101の約4m西側に位置する身舎2間×2間の総柱の建物である。桁行長4.3m、梁行長4.0mを測り、棟方向はほぼ東西方向を示す。柱間距離は、桁方向が平均で約2.2m、梁方向が約2.0mを測る。



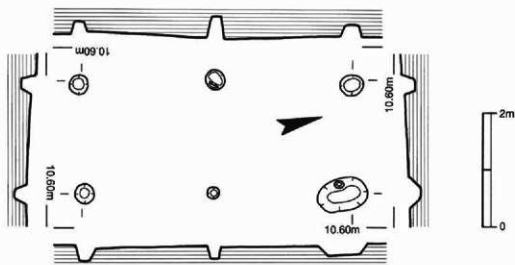
第6図 SB102実測図

SB103 I地区の南東隅に位置する身舎2間×1間の建物で、SB101やSB104とほぼ同程度の規模である。桁行長3.8m、梁行長2.6mを測り、棟方向はほぼ東西方向を示す。柱間距離は梁方向が比較的長めで、桁方向の平均は約1.9mを測る。



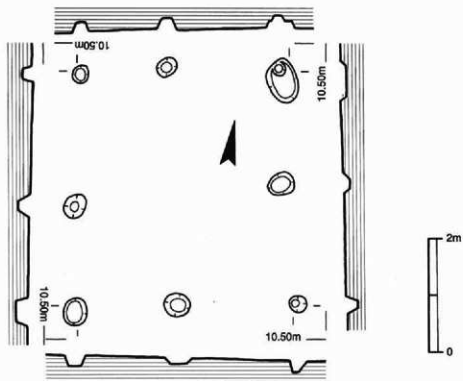
第7図 SB103実測図

SB104 SB103の南西約8mに位置する身舎2間×1間の建物で、同規模のSB101やSB103と比べるとやや縦長である。桁行長4.8m、梁行長2.0mを測り、棟方向はほぼ南北方向を示す。柱間距離は、桁方向がやや広めでその平均約2.4mを測る。



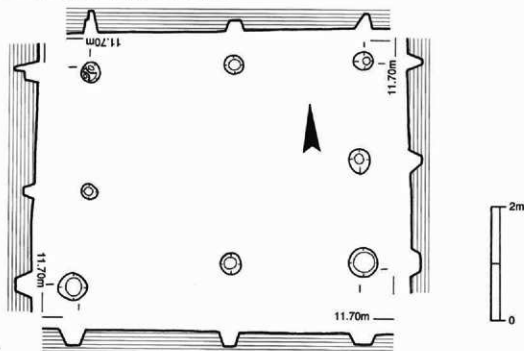
第8図 SB104実測図

SB105 SB104から南西方向に約16m離れた場所に位置する身舎2間×2間の建物である。桁行長4.2m、梁行長3.9mと、建物の規模は同じI地区のSB102とほぼ同じと言ってよいが、棟方向はほぼ直交する南北方向を示す。柱間距離は、桁方向が平均で約2.1m、梁方向はやや短く平均で約2.0mを測る。



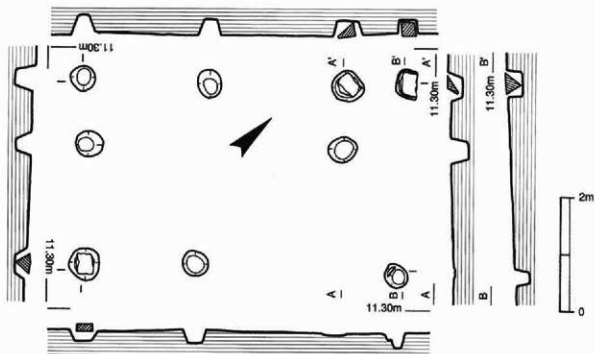
第9図 SB105実測図

SB106 I地区の北西隅に位置する身舎2間×2間の建物である。桁行長5.0m、梁行長3.7mを測り、棟方向はほぼSB102やSB103と同じく東西方向を示す。柱間距離は桁方向が長めで平均約2.5mを測り、梁方向は平均約1.8mを測る。



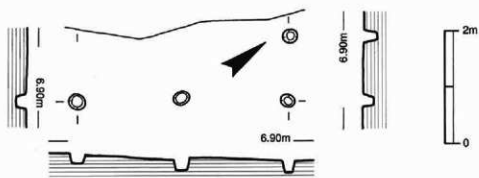
第10図 SB106実測図

SB107 SB103とはほぼ同じ場所に位置する礎石建物跡である。削平により礎石自体は3石を残すのみであった。検出した礎石の抜き取り痕から推定すると身舎3間×2間の建物と考えられるが、柱間距離に大きな差があることから庇を持つ可能性もある。棟方向はSB101と同方向で、桁行長5.6m、梁行長3.4mを測る。



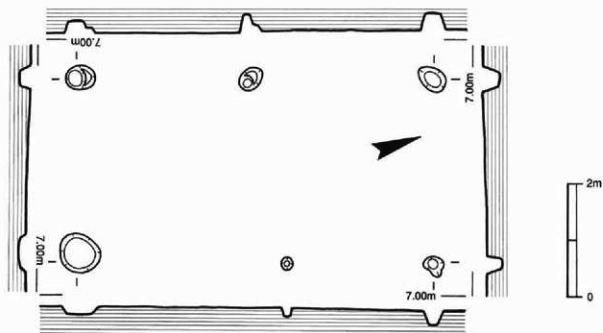
第11図 SB107実測図

SB201 II地区の北東隅に位置する。西半分が調査区外のため、建物としての形態及び規模等は明らかではない。検出した建物部分は、南北方向に2間分、さらに東西方向に1間分で、柱間距離は、南北方向が約1.8m、東西方向が約1.2mを測る。



第12図 SB201実測図

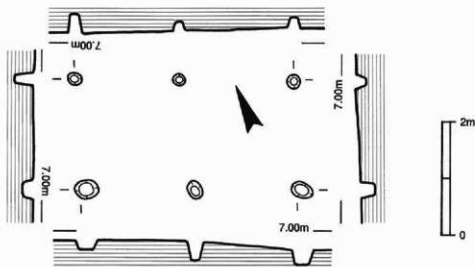
SB202 SB201の南側約4mに位置し、II地区で検出した掘立柱建物としては最も規模が大きい。棟方向は、軸をやや東にふるもののほぼ南北である。建物の規模は、身舎2間×1間で、桁行長6.3m、梁行長3.2mを測る。柱間距離はI・II地区全ての建物の中で最も長く、桁方向、梁方向とも平均約3.2mを測る。



第13図 SB202実測図

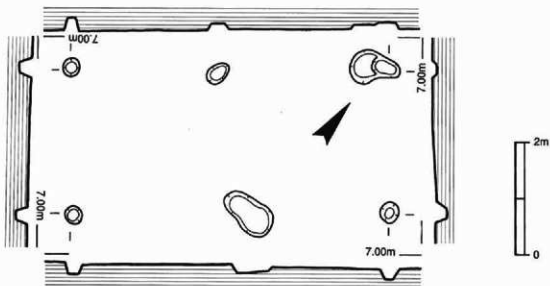


SB203 SB202の南東隅と部分的に重複する建物であるが、棟方向は、SB202とはほぼ直交する東西方向を示す。身舎2間×1間の比較的小さめの建物で、桁行長は3.8m、梁行長は1.9mを測り、柱間距離もそれぞれ1.9mである。SB202との時期差については不明だが、それほど大きな時期差はないと思われる。



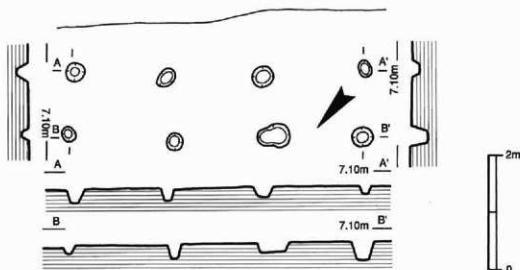
第14図 SB203実測図

SB204 SB203の南西2mに隣接する建物で、棟方向は、SB201と同じく北東から南西方向である。身舎2間×1間、桁行長5.6m、梁行長2.6mを測る。桁方向の柱間距離は平均で2.8mと比較的長目である。



第15図 SB204実測図

SB205 SB204と大部分が重複する建物である。南東方向が調査区外のため、建物の形態や規模等は明らかではないが、総柱もしくは庇付きの建物の可能性もある。北東方向から南西方向にかけて3間分、長さ5.2m、北西方向から南東方向にかけて1間分、長さ約1.2mの身舎を検出した。3間の柱間距離は平均で約1.7mを測る。



第16図 SB205実測図

## 2. 土坑 (第17図・第1表)

調査区内からⅠ地区60基、Ⅱ地区7基、合計67基という数多くの土坑を検出した。埋土は、Aso-4、AT、K-Ahに由来する火山灰を含む褐色、黄褐色、及び橙色の粘質土が主体であったが、平面プランは不整形のものが多く、床面の形状にも均一性は見られない。出土した遺物も、翼状刺片、石匙、石鏃、弥生土器片、土師器片と大きな時期差があり、土坑自体の用途についても不確定である。以下、遺物が出土した主な土坑について概要を記し、他は一覧表で示す。

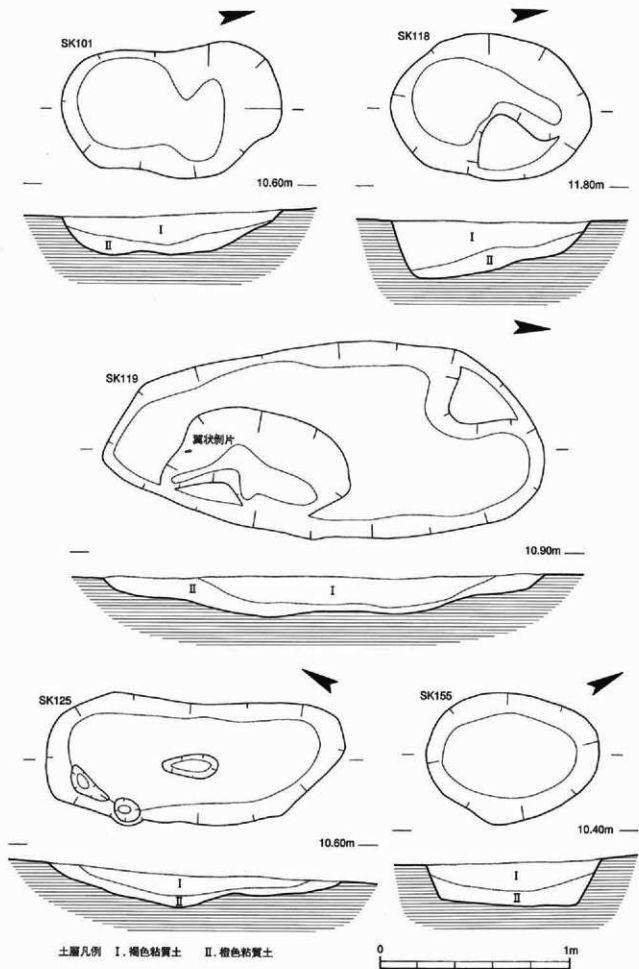
SK101 Ⅰ地区中央部やや南東寄りで見出した。平面プランが不整の楕円形を呈する比較的小型の土坑で、長径117cm、短径69cm、残存する深さ21cmを測った。上層の埋土である褐色粘質土中から縄文時代の石匙が出土した。

SK118 Ⅰ地区の北西側に位置し、検出した平面プランは楕円形を呈していた。長径106cm、短径77cm、残存する深さ26cmと小形の土坑である。埋土中から一見ナイフ形石器を思わせる鉆島産の黒曜石が出土した。

SK119 Ⅰ地区の北西寄りに位置する、比較的大型の土坑である。草履状の平面プランは、長径が232cm、短径114cm、残存する深さは21cmを測る。上層が褐色粘質土、下層が橙色粘質土の2層の埋土であったが、中央南側の床面から翼状刺片が出土した。翼状刺片は瀬戸内海一帯を中心に広く出土しているが、山口県での出土例は少なく、今回は県中央部で初の発見例となった。

SK125 Ⅰ地区の中央やや西寄りに位置し、平面プランは不整の楕円形を呈する。長径120cm、短径84cm、残存する深さ11cmを測り、縄文時代と推定される石鏃の未製品が出土した。

SK155 Ⅰ地区のほぼ中央に位置する、楕円形の土坑である。長径92cm、短径69cm、残存する深さ19cmと小型で、土師器片が出土した。



第17図 土坑実測図

第1表 土坑一覽表

遺構 番号	法 量			軸方位 (長軸を 本)	出土遺物	遺構 番号	法 量			軸方位 (長軸を 本)	出土遺物
	長径	短径	残存 壁高				長径	短径	残存 壁高		
SK101	117	69	21	N12° E	石靴	SK135	170	103	35	N24° E	
SK102	123	120	35	N18° E		SK136	175	90	22	N30° E	
SK103	152	94	33	N49° E		SK137	88	72	16	N64° E	
SK104	130	73	19	N23° E		SK138	99	65	22	N33° E	
SK105	131	67	27	N29° E		SK139	111	65	15	N64° W	
SK106	188	88	53	N41° E		SK140	166	83	18	N48° E	
SK107	85	63	36	N35° E		SK141	108	56	12	N79° E	
SK108	122	117	40	N26° E			96	60	17	N30° W	
SK109	116	55	27	N66° E		SK142	84	78	15	N43° W	
SK110	126	101	25	N40° W		SK143	130	79	15	N26° W	
SK111	93	68	34	N15° W		SK144	95	81	31	N38° W	
SK112	142	71	18	N54° E		SK145	81	71	22	N44° W	
SK113	127	99	35	N33° E		SK146	82	56	21	N51° E	
SK114	85	70	54	N57° W		SK147	111	68	11	N34° E	
SK115	85	59	18	N56° W		SK148	-	72	24	N60° E	石鏝
SK116	143	110	26	N27° E		SK149	82	66	32	N14° W	
SK117	111	74	30	N16° W		SK150	249	112	33	N26° E	
SK118	106	77	26	N39° E	黒曜石	SK151	114	70	21	N28° W	
SK119	232	114	21	N 2° W	翼状銅片	SK152	212	158	22	N28° E	
SK120	157	66	17	N20° E		SK153	65	51	43	N49° E	
SK121	148	119	40	N12° E		SK154	136	115	27	N77° W	
SK122	158	79	19	N32° W		SK155	92	69	19	N28° E	土師器片
SK123	185	139	29	N58° W		SK156	159	73	19	N29° E	
SK124	337	133	29	N53° E	水晶片	SK157	93	42	19	N19° E	
SK125	120	84	11	N86° W	石鏝未製品	SK158	131	126	14	N20° E	
SK126	157	64	18	N28° W		SK159	121	86	21	N61° E	
SK127	144	80	22	N 2° E		SK160	131	85	21	N45° E	
SK128	205	101	35	N58° E	水晶片	SK201	135	66	24	N87° E	
SK129	193	146	40	N 4° E		SK202	192	88	16	N76° W	
SK130	442	268	38	-	弥生土器片	SK203	136	54	13	N19° E	
SK131	172	135	32	N38° W		SK204	104	75	34	N48° E	
SK132	148	77	13	N24° E	水晶	SK205	98	84	33	N90° E	
SK133	75	76	13	N51° E		SK206	128	90	36	N 8° W	
SK134	103	64	14	N84° E		SK207	142	70	23	N21° E	

## 3. 溝と水溜遺構 (第18図)

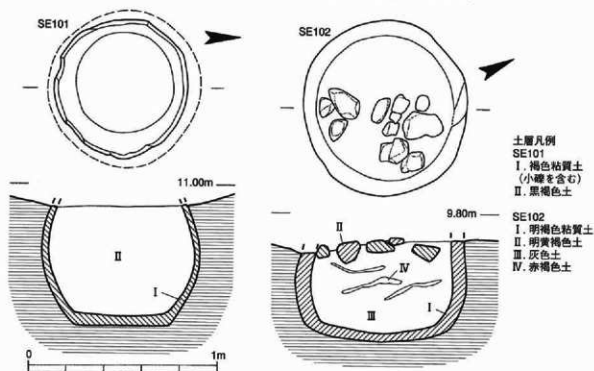
I地区で検出した大小10条の溝は、いずれも畦畔に沿った形で延びていることから、排水用の溝と思われる。一方、溝に付設する形で検出したSE101とSE102も、周辺の溝との位置関係から見て、溝に流れる水を集めることを目的とした遺構と考えられる。以下、主なものについて述べる。

SD101 幅35~40cm、深さは最大で25cm、断面形は方形を呈する。I地区の中央部にL字型に掘り込まれており、検出した総延長は19.1mを測る。粘質の土地の排水性を高めるための暗渠排水と見られ、溝の中にはびっしりと石炭殻が敷き詰められていた。中津原遺跡の南東に位置する青江湾一帯は、近世から塩田として開作が進み、昭和30年代まで製塩事業が続けられていた。製塩の燃料として使われた石炭殻を暗渠排水に有効利用したものと思われるが、溝が作られた時期については決め手となる資料はなかった。ただし、昭和初期まで遡ることはないと思われる。

SD102 I地区の中央部に北東から南西に延びる溝である。検出した溝の幅は42~62cm、総延長18.4m。深さは最大でも12cmと浅く、かなり削平を受けているものと見られる。溝がほぼ終結すると思われる地点の北西側に隣接してSE101が位置している。遺物は、備前焼の壺の口縁部と瓦質土器片が出土した。

SD103 SE101を挟んで、SD102と向かい合う形に延びる幅27～42cmの溝である。南西側は若干調査区外に延びると推定されるが、検出した総延長は26.2m、削平のため深さは11cmと浅い。埋土中から、土師質の鉢、萩焼の碗、陶器碗、青磁壺片、土錘、石鏝などが出土した。

SD108 I地区の南西部を、SD102・SD103と平行に延びる溝である。最大幅42cm、深さ10cmを測り、南西側はさらに調査区外に続く。埋土中から足鍋の脚部片が出土した。



第18図 SE101・SE102実測図

SE101 SD102がほぼ終結する地点に位置する。地山に直接掘り込まれた遺構の平面形は71×74cmの円形で、内面には厚さ4cm程度の褐色粘質土が貼られていた。残存する深さは床面まで58cm、内部の最大径は検出した面より約25cm下で76cmを測り、胴張りの断面形を呈する。

SE102 SD107もしくはSD109に関連する水溜で、SE101と同様に、内面に厚さ9cm前後の明褐色粘質土が貼られていた。円形の平面プランは、86×93cmとSE101より一回り大型であるが、残存する深さは47cmであった。検出時に、周囲の壁面が落ち込んでいるのが確認され、後世に削平を受けたことは明白である。埋土中から、近世後半の陶器の小坏と染め付けの磁器片が出土した。

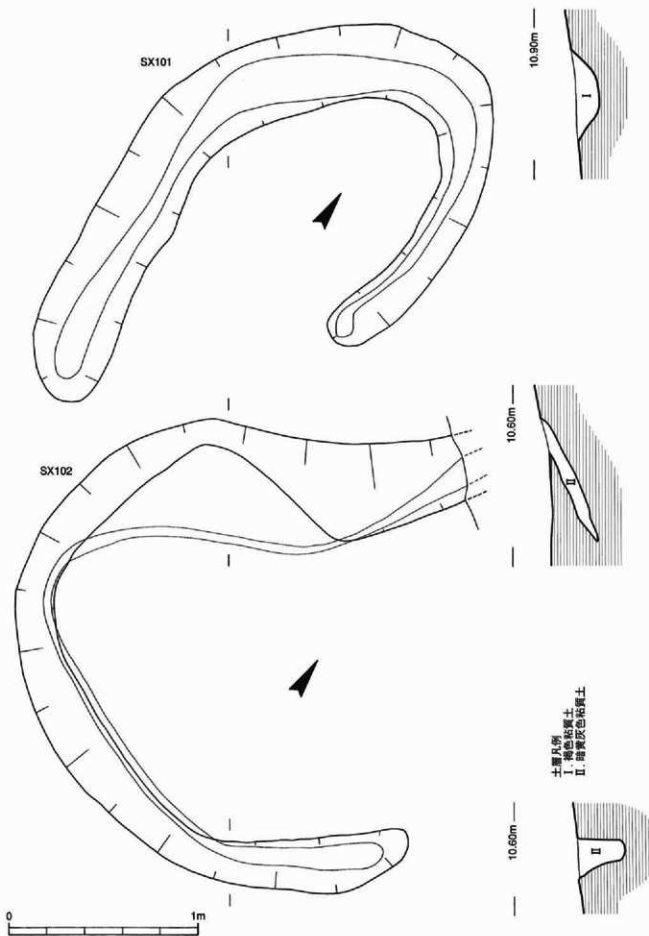
#### 4. その他 (第19図)

I地区の南東端寄りで、用途不明の遺構を2基検出した。

SX101 I地区の南東部に位置し、幅22～43cm、深さ15cm、全長4.4m程度の溝が、南側を開いて馬蹄形に廻る土坑である。他の土坑と同様、褐色粘質土を埋土とする。

SX102 SX101の南東に隣接し、平面形は北東側が開いた馬蹄形を呈する。平面幅21～50cm、深さ25cm、全長5.3mを測り、土層断面の観察では、暗黄灰色粘質土の埋土が馬蹄形の内側に入り込んでいた。

SX101・SX102とも遺物は出土しておらず性格は不明であるが、風倒木跡の可能性もある。

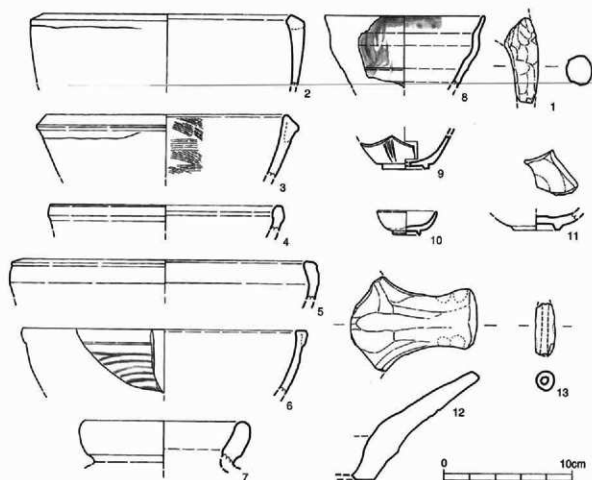


第19圖 SX101・SX102実測図

## IV 遺 物

調査の結果、土師質土器、国産陶磁器、土製品、石製品等の遺物が出土した。大半がSD103から出土した近世のもので、石製品に関しては、旧石器から縄文時代のものである。

1は、足鍋の脚部片で、下部端が欠損している。表面は摩耗が著しいが指頭圧痕が残る。2は、土師質の鉢。口縁部は、張り付けにより肥厚させている。器面は、ナデ調整。3は、土師質の鉢。口縁部は外側に押し曲げて形成し、面をもって斜めに終わる。内面は、ハケ調整。4は、土師質のこね鉢か。口縁部のみで、摩耗が著しい。5は、土師質の鉢。体部は、緩やかに外傾した後内湾して立ち上がる。口径は、22.6cm。6は、唐津系の陶器の鉢。白化粧土による刷毛目文様を施す。7は、備前の壺。口縁部はくの字状に外反し、屈曲部から先がやや内湾し端部に至る。8は、萩焼の開口碗。口縁を内抱え気味に作り、胴部を凹ませたり膨らませたりして何段もの変化を持たせる。内外面に藁灰釉の後、鉄釉を施しかけ流しの技法を有する。9は、施釉陶器の碗。小杉碗、または、若松文碗と呼ばれるものである。体部外面下部に松の文様が描かれている。10は、陶器の小坏。灰釉または土灰釉を施してある。11は、磁器の皿。内面に、蛇の目釉刺ぎを施している。溶融不良気味。8・9・11は、江戸時代後半に比定できる。12は、十能の取っ手部分である。断面は半楕円形を呈し、指頭圧痕が残る。13は、土錘である。やや胴膨らみのタイプで両端部は、摩耗している。



第20図 出土遺物実測図①

1～13の出土位置は、1と11がⅠ地区のSD108、2～5と8・9・13がSD103、7がSD102、10がSE102、6はⅠ地区の中央部西端、12はⅡ地区南東端であった。

続いて、14～18はいずれもⅠ地区から出土した石製品である。

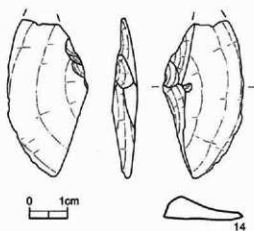
14は、SK119から出土した安山岩製の翼状剥片。風化によって灰白色を呈し、観察した結果二次調整は受けていない。打面部には片側だけに調整痕が認められ、打点が残される。翼状剥片を得るための加撃が底面にまで十分達しなかったせいか底面はなく、断面は三角形を呈する。上部の一部を欠失し、現存長は4.1cm、最大幅2.1cmを測る。

翼状剥片は、柳井市（黒鳥浜遺跡）、宇部市（常盤池遺跡）、豊浦郡菊川町（山ノ口遺跡）など、県内では過去に数例しか確認例がなかったが、県央山口市周辺地域での貴重な発見例となった。

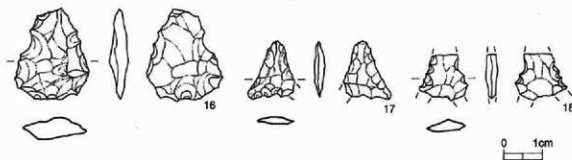
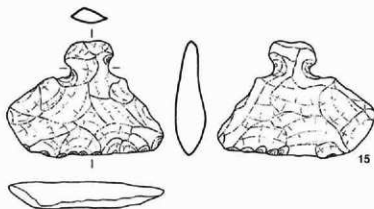
15は、安山岩製の横型の石匙で、SK101より出土した。かなり風化していたが、大きめのつまみ部は、剝離を利用して表裏両面から加工して作られている。つまみ部の対辺の刃部両面に調整が見られ直線的である。法量は、長さ3.1cm、幅4.1cm、厚さ0.8cmを測る。

16は、石鏃の未製品で、SK125から出土した。石材は、姫島産の黒曜石である。17は、SD103の埋土に混入していた凹基式の石鏃で、基部の片方の端部を欠失する。小形で石材は安山岩である。18も凹基式の石鏃で、SK148から出土した。先端部と基部の両端をいずれも欠失し、石材は姫島産の黒曜石である。

16～18の時期は、いずれも縄文時代と思われる。



第21図 出土遺物実測図②



第22図 出土遺物実測図③



## V ま と め

今回の中津原遺跡の発掘調査は、秋徳町内での初めての本格的な遺跡の発掘調査である。

秋徳町内には、昭和58年度に山口県教育委員会によって行われた生産遺跡分布調査の際のトレンチ調査で、ある程度の遺跡の広がり具合が明らかになった大河内製塩遺跡を始めとして、数多くの遺跡の存在が確認されている。しかし、その大部分は遺物散布地として把握されている程度で、前述の大河内遺跡のトレンチ調査や昭和37年の農業構造改善事業に伴う菅倉古墳の緊急調査などのわずかな例を除いて、本格的な調査はされていない。従って、遺跡の性格等についての詳細については不明のものが多く、中には開発行為により人知れず破壊されてしまった遺跡も見受けられる。そうした中で、本遺跡の調査は、秋徳町の先史を解明する上で先鞭となる発掘調査となった。

以下、今回の調査で明らかになった点について、概略を述べることにする。

調査成果の中で一番に特筆されるのは、SK119から出土した約2万年前の翼状剥片であろう。ナイフ形石器の素材となる翼状剥片石核及び翼状剥片は、残念ながら山口県内ではその存在は想定されながらも出土例が少なく、今回出土した安山岩製の翼状剥片は山口県中央南部地域で初めての発見例として貴重な資料となった。言うまでもなく、翼状剥片はいわゆる「瀬戸内技法」と呼ばれる「国府型ナイフ形石器」を作成する工程の第2段階で作られられる剥片である。昭和51年(1976)から調査が始まった瀬戸大橋建設に伴う備讃瀬戸地方の一連の発掘調査で、盤状剥片からナイフ形石器の完成品までの一括資料を含む膨大な資料が発見され、最近では、石材産地(奈良・大阪府堺境二上山や香川県五色台など)とも関連づけた研究が急速に進んでいる。また、「瀬戸内技法」は、瀬戸内東部地域や近畿地方西部が中心的な分布地域とされているが、山口県近辺では、近年になって、山口・広島県境の冠高原が安山岩を素材とするナイフ形石器の生産地であることが確認され、継続的な調査が行われている。山口県にとっては隣接県でもあり、旧石器の石材供給地として、今後新たな研究成果が加わることが期待される。

ところで、土坑内の埋土や地山土の分析結果では、Aso-4やAT、K-Ahに由来する鉱物や火山ガラスが含まれていることが明らかになった。中津原遺跡一帯は秋徳砂礫層の上部に赤褐色砂質粘土層が堆積しており、これは宇部砂質粘土層(Aso-4やATなどの火山灰の再堆積土)に対応するものと考えられている。宇部砂質粘土層は旧石器の包含層とされており、今回の旧石器も火山ガラスの成分を含む橙色粘質土中から出土した。残念ながら、土坑の埋土である橙色粘質土と赤褐色砂質粘土層との関連は明らかではないが、秋徳町内の赤褐色砂質粘土層についても旧石器の包含層としての可能性をもつという問題を提起するものと言えよう。

SK119の翼状剥片だけでなく、調査区内で確認された多数の土坑や柱穴の埋土中からは、縄文時代の時期と推定される石匙や石鏃などの石製品の外に、それらの石材となる安山岩や水晶及び姫島産の黒曜石が数多く出土した。土坑について言えば、総体的に平面形は不整形で床面の形状もまちまちであり、これといった規格性は見られない。埋土は、赤褐色の地山土に対して、褐色もしくは黄褐色及び橙色の粘質土が主体であった。SK130に混入していた弥生土器片とSK155から出土した土師器片以外には、いずれの土坑からも土器遺物が全く出土していないため、時期についての決め手は得られておらず、土坑の性格を推定する手掛かりは皆無と言ってよい。しかしながら、土坑の埋土中から石製

品を中心とする遺物が出土していることは事実であり、土坑自体が遺構としての何らかの意味を持つことは否定できない。

ところが、調査もほぼ終了に近づいた段階で、近隣の阿知須町の砂郷遺跡でも、石器の石材となる水晶、黒曜石などの石製品や石片の他、縄文土器片を多数出土した同じような土坑群の検出が報告されていることを知った。砂郷遺跡の土坑群の埋土は、「黄褐色のもの」と「アカツチ」と報告されており、中津原遺跡の土坑群の埋土との共通性も見られることを指摘しておきたい。

秋徳町の依頼を受けて山口県教育委員会が行なった昨年度の子察調査では、弥生土器片や中世の土師器片が確認されており、今年度の本格調査でも同時期の遺構の検出が期待されていた。しかし、調査の過程で、中津原遺跡一帯の丘陵が、近世以降に畑として開発された際に、予想された以上に大規模な削平を受けていることが明らかになり、近世以前の土器遺物は、足跡片、土師器片、弥生土器片のみであった。従って、多数検出された土坑や掘立柱建物跡については、掘立柱建物が中世段階の可能性が高いものの、時期の特定には至っていない。一方、溝や礎石建物跡など、ある程度時期が明らかでない遺構は、出土遺物をもとにするといずれも近世後期に比定されるものである。また、柱穴数や建物跡の数から見ると、建物が同一場所に時期をずらして重複して建てられた形跡も窺えなかった。このことは、周辺に川がなく、井戸以外に真水を手に入れることが難しいという、かなり制約された地形的条件を勘案すると、今回の調査区内から井戸が1基も検出できなかったことと併せて、当該地が継続的に居住地として利用された可能性が少ないことを示唆するといえるかも知れない。

最後に、今回の調査では、秋徳町教育委員会並びに秋徳町中央公民館や調査に参加していただいた作業員の方々を始めとして、地元の方々にも大変お世話になった。中でも、水を手に入れにくいという現地の事情下で、快く水を提供して下さった調査区に隣接する養護老人ホーム「秋楽園」と、必要に応じて重機を提供していただいた株式会社日進建設には、紙上を借りて感謝したい。

#### 参考文献

- 山口県教育委員会 『生産遺跡分布調査報告書—製塩—』 1984  
秋徳町 『秋徳町史』 1982  
奈良国立橿原考古学研究所編 『二上山・桜ヶ丘遺跡』 1979  
本州四国連絡橋公団・香川県教育委員会  
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 西方遺跡』 1985 その他  
中・四国旧石器文化談話会 『瀬戸内技法とその時代』 1994  
藤野次史 『広島県佐伯郡吉和村冠遺跡群採集の遺物(1)』  
(広島大学文学部宍積遺跡群発掘調査室「宍積遺跡群調査室年報」 1985)  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『冠遺跡群 V』 1998 その他  
山口県旧石器文化研究会 『宇部台地における旧石器時代遺跡(9)—常盤池遺跡その(2)—』  
(『古代文化』第41巻第3号 1991)  
財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 『山ノ口遺跡』 1991  
松尾征二 『吉南地域東部の更新統』(『岡村義彦先生退官記念誌』 1982)  
小野忠照 『第四紀の宇部の海岸地形』  
(宇部市教育委員会他 『宇部の遺跡—宇部市域遺跡群学術調査報告—』 1968)  
山口県旧石器文化研究会 『長洲遺跡発掘調査概報』 1985  
阿知須町教育委員会 『砂郷遺跡発掘調査報告』 1999

## 付編 吉敷郡秋穂町出土の製塩土器について

今回の発掘調査に伴って行った周辺の遺跡についての資料収集の中で、秋穂町の歴史民俗資料館に町内の大河内一帯で表面採集された多量の製塩土器が保管されていることを知った。周知の通り、大河内遺跡は美濃ヶ浜遺跡と並んで山口沿岸一帯を代表する古墳時代後期の製塩遺跡であり、山口県教育委員会の生産遺跡分布調査の際に、遺跡範囲の広がりや確認を含めて、トレンチ調査が行われている<sup>註①</sup>。その結果、製塩関連の遺構こそ発見されなかったものの、多量の製塩土器（美濃ヶ浜3類に比定）が重層して出土したことが報告されている。ここでは、今まで紹介される機会に恵まれなかった秋穂町歴史民俗資料館所蔵の製塩土器を紹介し、製塩土器研究へのささやかな資料提供としたい。

資料館に所蔵されていた製塩土器には完形品は一点もなく全て破片であり、その総点数は380点に及ぶ。内訳は脚部片が79点、碗の口縁部片が34点、その他の碗部片267点であった。

碗部片については、口縁部も含めて実測可能な大きさのものはなかったが、総体的に器壁が薄く、平均的に5mm前後、中には2mm程度のもも見られた。胎土は、砂粒を含むものの全体的に密であり、色調はほとんどが橙褐色を基調とする。しかし、加熱によって、もともと橙褐色だった器壁が暗灰色に変色したり、器壁が剝離したものが多く見られた。一方、碗部がジグソーパズルのような細片であるのに対し、脚部は比較的残りが良い。脚底部から碗の内底の一部までが残存しているものが大部分であり、従って、今回の実測対象も全て脚部である。脚部は、指頭によってひねりながら成形されているが、外面の調整は碗内部がナデによって丁寧に調整されているのに対し雑な印象を受ける。

手作りであるため、個々の脚部の形状に違いがあるのはもちろんだが、実測した61点について、脚柱高<sup>註②</sup>、脚底径、脚底形状をもとにして、敢えて第2表のように分類してみた。これをまとめると、脚柱高が短いものほど、脚柱径は太めで、脚底径が広く、脚底形状も深くなり、脚柱高が高くなるに従って、脚柱径は細くなり、脚底径も狭まり、脚底も浅くなる傾向があると言ったことができよう。いわゆる「美濃ヶ浜式土器」については、宇部市の波羅が浜遺跡の発掘調査の成果をもとに基礎的な編年作業が行われており<sup>註③</sup>、今回実測した製塩土器も、基本的には「美濃ヶ浜式土器」の3類の特徴を持ち、極端な形状の違いは見られない。しかしながら、同じ3類の中にも脚高の違いによる微妙な違いがあることは事実であり、これが、製作の時期差によるものか、そのほかの要因なのかは定かではなく、今後の研究を待ちたいと思う。

(大村)

第2表 秋穂町出土製塩土器の脚柱高と脚底形状・脚底径

脚柱高	脚底形状				合計	脚底径 3cm未満	脚底径 3cm以上
	V字	U字	皿状	浅いV			
4.0cm以上4.5cm未満	1	0	0	0	1 (2%)	0	1
4.5cm以上5.0cm未満	5	0	0	0	5 (9%)	0	5
5.0cm以上5.5cm未満	13	0	2	2	17 (33%)	9	8
5.5cm以上6.0cm未満	11	1	0	4	16 (31%)	6	10
6.0cm以上6.5cm未満	4	2	2	5	13 (25%)	6	7
不明	1	0	2	6	9	7	2
合計	35 (57%)	3 (5%)	6 (10%)	17 (28%)	61 (100%)	28	33

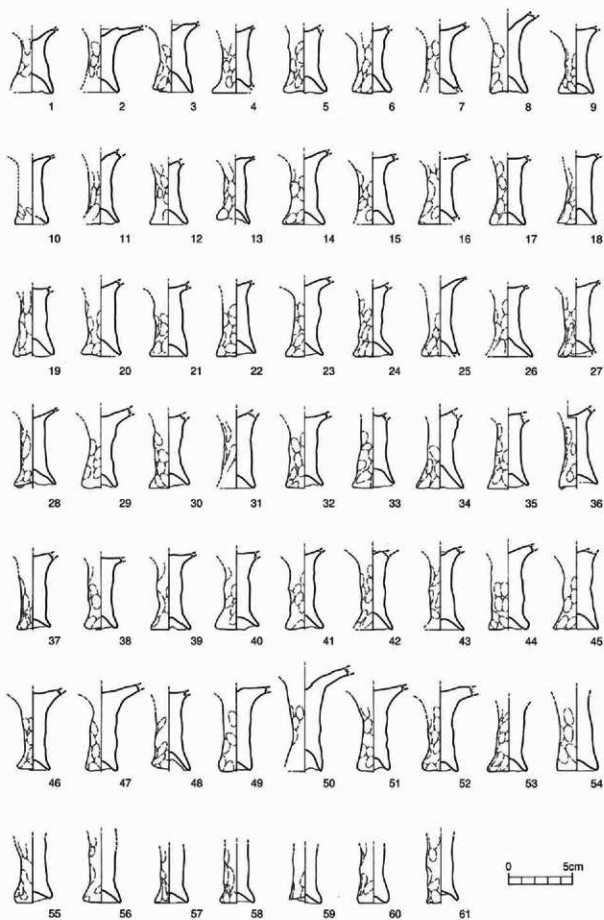
参考文献 近藤義郎『日本土器製塩研究』青木書店 1994

注① 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書-製塩-』1984

注② 計測の便宜上、脚底から脚底内底までの長さを脚柱高とした。

注③ 小野忠照・本村豪章『波羅が浜遺跡』（宇部市教育委員会ほか『宇部の遺跡』1968）

注④ 近藤義郎『宇部市波羅が浜遺跡について』（宇部市教育委員会ほか『宇部の遺跡』1968）



第23图 秋穂町出土製埴土器実測图

第3表 秋穂町出土製塩土器観察表

(単位はcm)

No	脚 柱		脚 底		陶内底	胎 土	色 調	備 考	
高さ	径	形 状	径	形 状	形 状				
1	4.2	2.1	ハの字	(3.2)	V字形	V字底	砂粒含	にぶい橙色	
2	4.5	1.9	ハの字	(3.6)	V字形	皿状	砂粒含	赤橙色・黄褐色	陶内底一部剝離
3	4.8	2.0	ハの字	3.2	V字形	皿状	砂粒含	橙色	陶内底剝離
4	4.8	2.1	寸胴・椗広	3.8	V字形	皿状	密	黄褐色	
5	4.9	2.2	寸胴・椗広	3.3	V字形	皿状	砂粒含	にぶい黄褐色	
6	5.0	2.0	寸胴・椗広	3.0	V字形	皿状	密	黄褐色	
7	5.0	1.9	ハの字	3.3	V字形	皿状	砂粒含	黄褐色	
8	5.0	2.1	寸胴・ハの字	2.9	V字形	V字底	砂粒含	黄褐色	
9	5.0	1.7	中括れ・椗広	2.8	皿状	皿状	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
10	5.0	1.9	細身・ハの字	2.5	浅いV字	皿状	密	にぶい橙色	陶内底剝離
11	5.1	1.8	細身・椗広	(2.8)	V字形	皿状	砂粒含	にぶい橙色	陶内底貼り付け
12	4.8	1.8	細身・椗広	3.0	V字形	皿状	砂粒含	赤褐色	陶内底剝離
13	5.1	1.7	細身・椗広	2.6	V字形	皿状	砂粒含	にぶい橙色	
14	5.2	1.9	細身・椗広	3.3	浅いV字	皿状	砂粒含	黄褐色	陶内底剝離
15	5.2	2.0	寸胴・ハの字	(2.8)	V字形	平底	砂粒含	黄褐色	
16	5.2	1.9	寸胴・椗広	(3.4)	V字形	平底	砂粒含	黄褐色	
17	5.2	1.8	中括れ	2.7	V字形	平底	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
18	5.3	1.8	中括れ・椗広	2.9	V字形	皿状	砂粒含	にぶい橙色	
19	5.4	2.1	ハの字	3.2	V字形	平底	砂粒含	黄褐色	陶内底剝離
20	5.4	2.2	寸胴	3.2	V字形	V字底	砂粒含	黄褐色	
21	5.4	2.1	寸胴	2.9	皿状	皿状	密	赤褐色・黄褐色	
22	5.6	1.9	細身・ハの字	3.1	V字形	皿状	密	褐色・黄褐色	陶内底剝離
23	5.6	1.8	細身・ハの字	2.9	V字形	皿状	密	赤褐色・黄褐色	
24	5.4	1.7	細身・椗広	3.2	V字形	皿状	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
25	5.4	1.8	細身・椗広	(3.0)	V字形	皿状	砂粒含	黄褐色	
26	5.5	1.9	細身・椗広	(3.8)	V字形	平底	砂粒含	黄褐色	
27	5.5	1.9	細身・椗広	3.8	V字形	皿状	砂粒含	にぶい橙色	
28	5.6	1.9	細身・椗広	3.3	V字形	皿状	砂粒含	にぶい橙色	
29	5.6	1.7	中括れ	2.9	V字形	皿状	密	黄褐色	陶内底に一部剝離
30	5.6	1.9	中括れ	(3.8)	V字形	皿状	密	褐色・灰白色	
31	5.6	2.1	中括れ	(2.6)	V字形	皿状	砂粒含	にぶい黄褐色	
32	5.6	2.0	寸胴・柱状	2.8	浅いV字	皿状	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
33	5.7	2.0	寸胴・ハの字	3.3	U字形	皿状?	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
34	5.7	2.0	寸胴・椗広	(3.3)	V字形	皿状	密	黄褐色	脚柱上部に粘土貼り付け
35	5.8	1.9	細身・ハの字	3.2	V字形	平底?	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
36	5.8	1.7	細身・ハの字	3.0	浅いV字	皿状	砂粒含	にぶい橙色	
37	5.8	1.9	細身	2.6	浅いV字	皿状	砂粒含	にぶい黄褐色	
38	5.7	1.8	細身	2.6	V字形	平底	密	黄褐色	
39	5.9	1.9	細身・椗広	(3.4)	浅いV字	平底	砂粒含	にぶい橙色	
40	6.0	1.9	細身・椗広	3.4	皿状	平底	砂粒含	褐色・灰白色	
41	6.0	1.9	細身・椗広	3.0	V字形	皿状?	砂粒含	赤褐色・黄褐色	
42	6.0	1.8	細身・椗広	3.2	V字形	皿状?	砂粒含	黄褐色	
43	6.0	1.9	細身・椗広	(3.6)	浅いV字	V字底	砂粒含	にぶい橙色	
44	6.0	2.5	寸胴・柱状	3.2	浅いV字	皿状	密	赤褐色・黄褐色	
45	6.1	2.2	寸胴・椗広	3.6	V字形	皿状	密	黄褐色	
46	6.1	1.7	細身・椗広	2.7	浅いV字	皿状	砂粒含	赤褐色・黄褐色	陶内底は加熱により変色
47	6.2	2.1	ハの字	2.6	浅いV字	皿状	密	赤褐色・黄褐色	
48	6.2	2.1	椗広	(3.1)	V字形	平底	砂粒含	にぶい橙色	陶内底剝離
49	6.2	2.0	柱状	2.6	浅いV字	平底	砂粒含	褐色	陶内底貼り付け
50	6.3	2.2	中括れ	2.6	U字形	V字底	砂粒含	赤褐色	
51	6.3	1.9	中括れ	2.6	U字形	平底	砂粒含	黄褐色	
52	6.3	2.0	中括れ	2.9	皿状	皿状	砂粒含	褐色	
53	—	2.0	細身・椗広	3.0	V字形	砂粒含	砂粒含	黄褐色	
54	—	2.6	寸胴	3.2	浅いV字	密		赤褐色	
55	—	1.9	中括れ	2.5	皿状	砂粒含	砂粒含	にぶい黄褐色	
56	—	1.8	細身・椗広	2.9	浅いV字	砂粒含	砂粒含	黄褐色	
57	—	1.7	細身・椗広	2.5	浅いV字	砂粒含	砂粒含	にぶい橙色	
58	—	1.9	細身・椗広	2.6	浅いV字	密		にぶい黄褐色	
59	—	1.7	柱状	2.5	浅いV字	砂粒含	砂粒含	にぶい橙色	
60	—	1.8	柱状	2.1	浅いV字	砂粒含	砂粒含	にぶい黄褐色	
61	—	2.1	柱状	2.5	皿状	砂粒含	砂粒含	にぶい橙色	

圖 版



中津原遺跡遠景（南より）



中津原遺跡全景



調査前風景（西より）



調査前風景（南より）

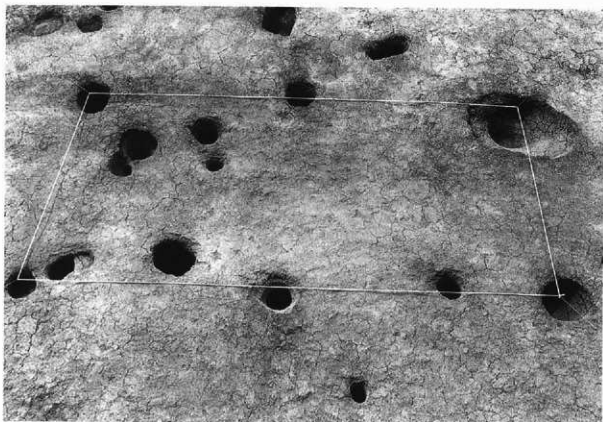




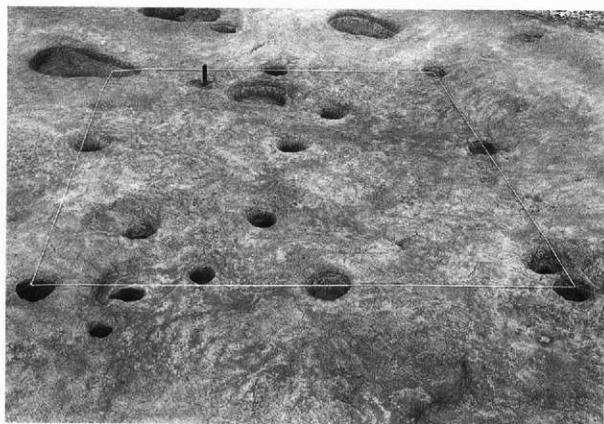
I地区調査後全景



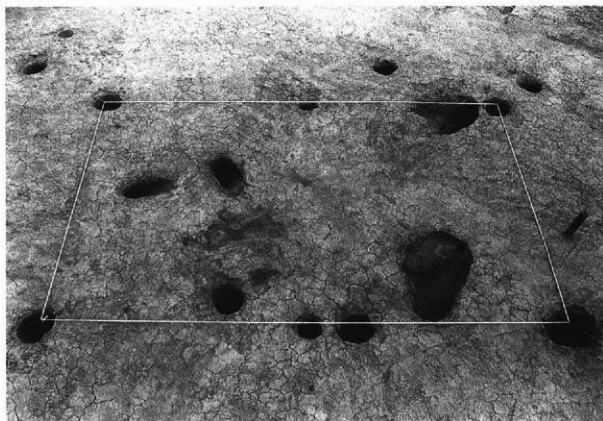
II地区調査後全景（北東より）



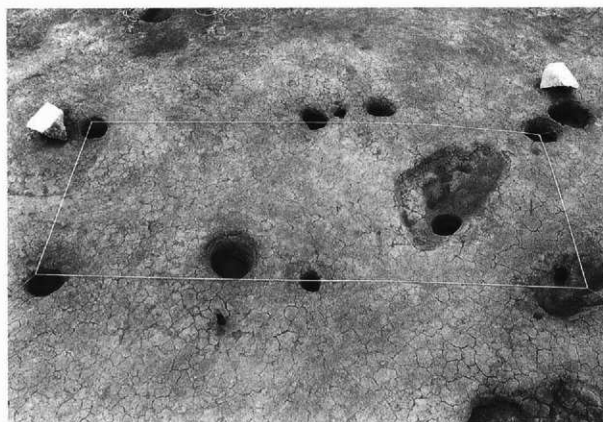
SB101全景 (南東より)



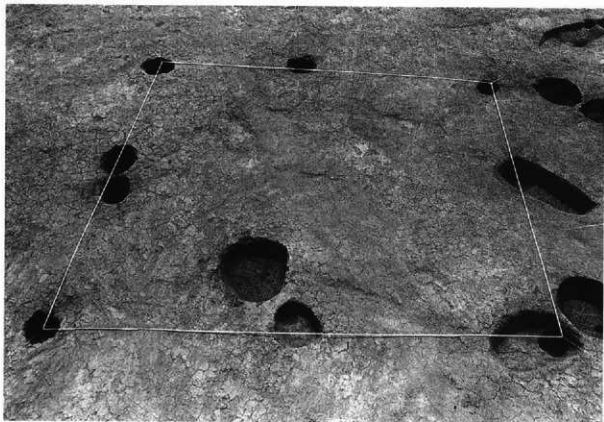
SB102全景 (東より)



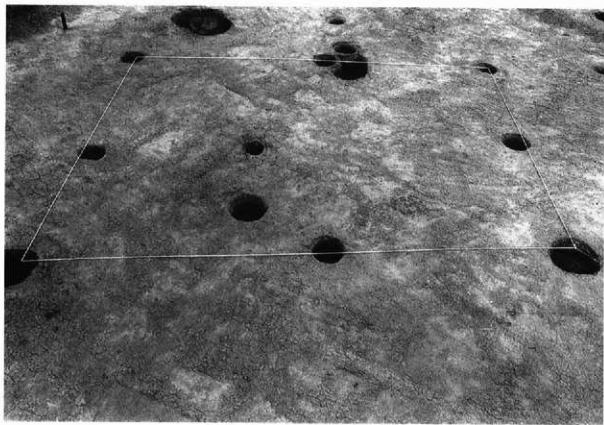
SB103全景 (南より)



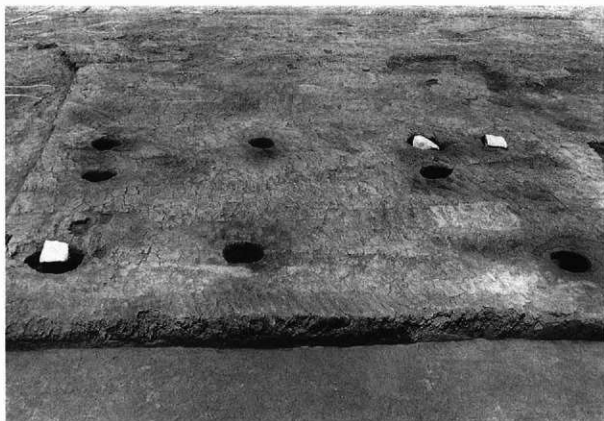
SB104全景 (東より)



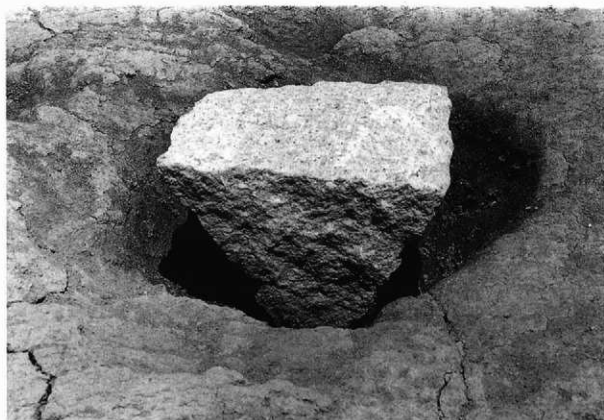
SB105全景 (東より)



SB106全景 (南より)



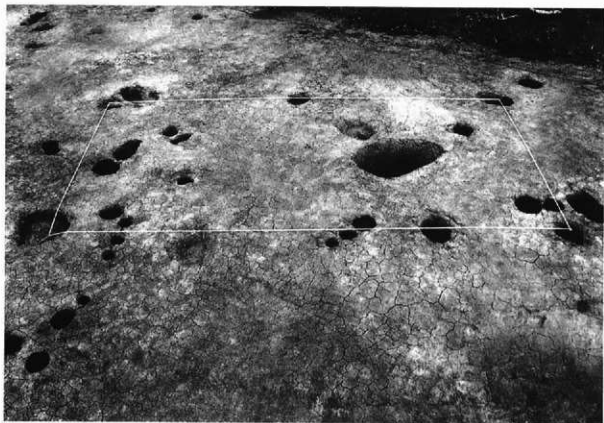
SB107全景 (南東より)



SB107南隅礎石検出状況 (南西より)



SB201全景 (南東より)



SB202全景 (東より)



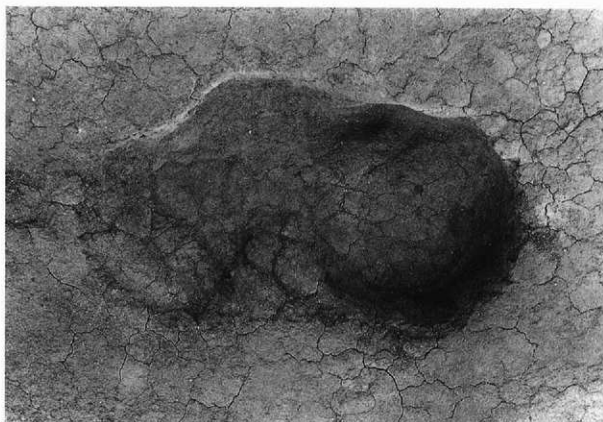
SB203全景 (南より)



SB204全景 (北西より)



SB205全景 (北西より)

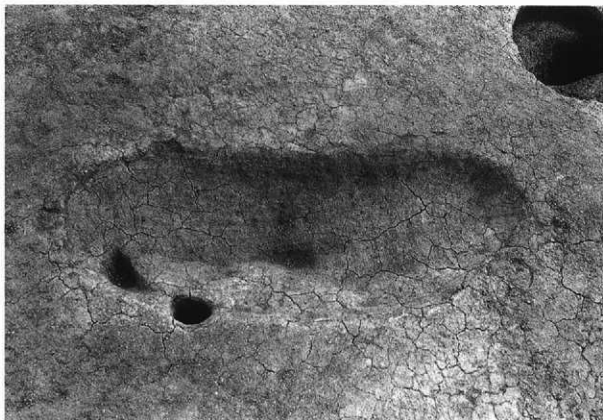


SK101完掘 (東より)

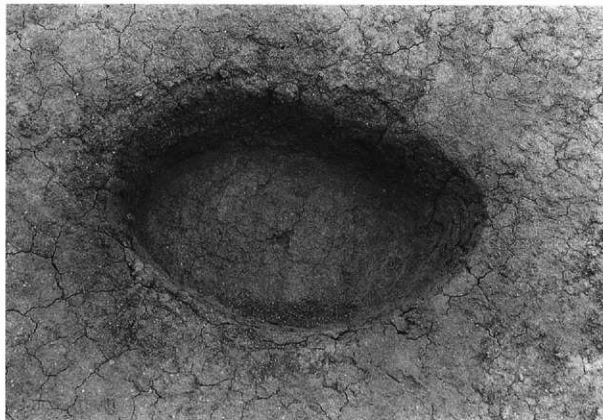




SK119完掘 (東より)



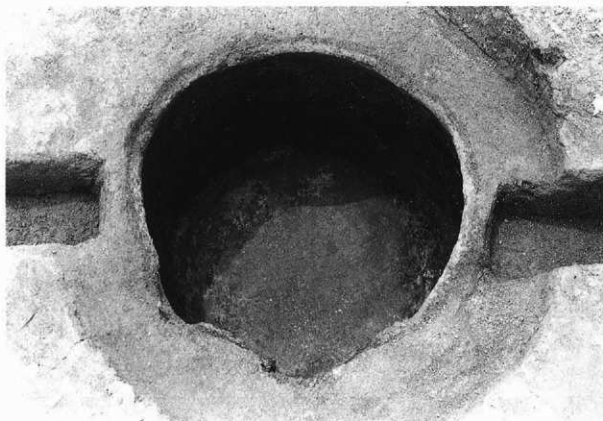
SK125完掘 (南西より)



SK155完掘（南東より）



SD102（上）・SD103（下）とSE101（南西より）

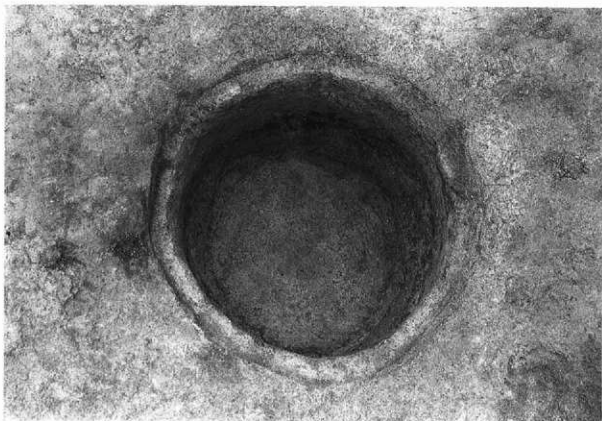


SE101完掘（東より）

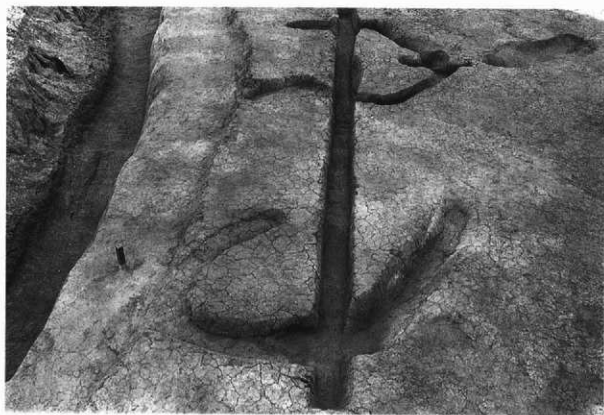


SE102遺構検出状況（南東より）

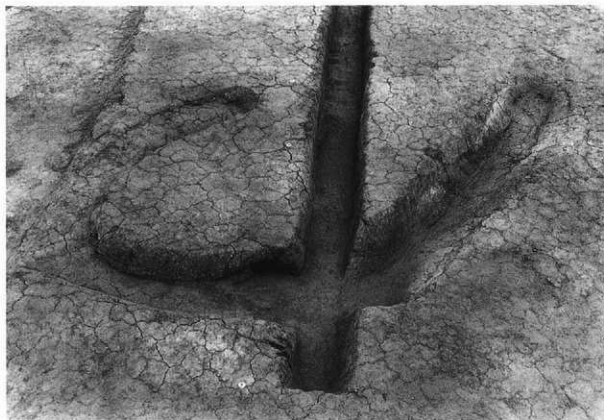
図版14



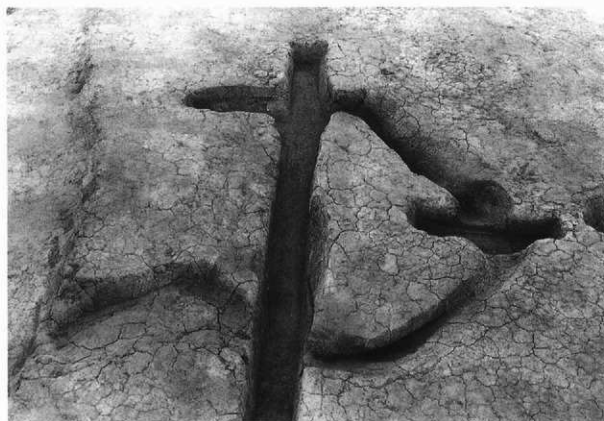
SE102突掘 (南東より)



SX101・SX102突掘 (北西より)



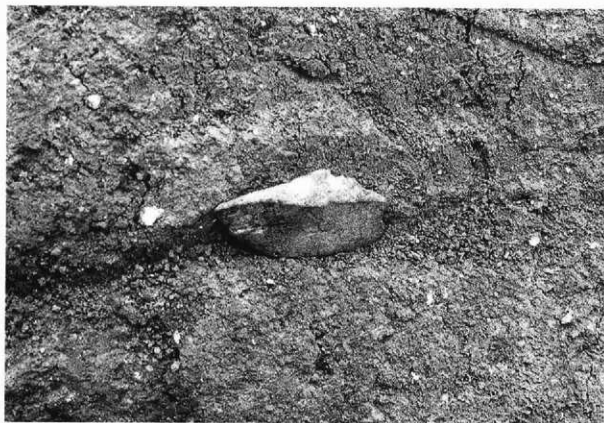
SX101完掘 (北西より)



SX102完掘 (北西より)



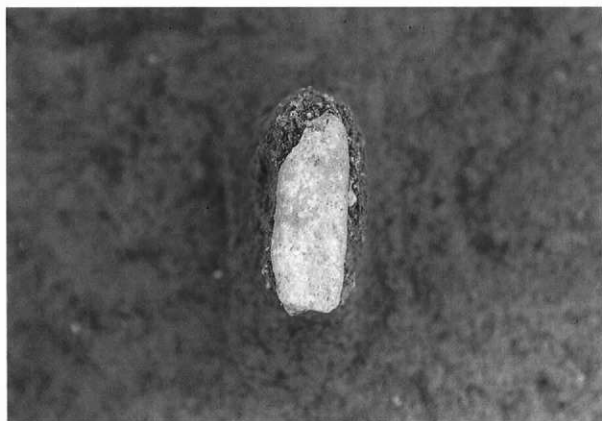
SK101石匙出土状況（北より）



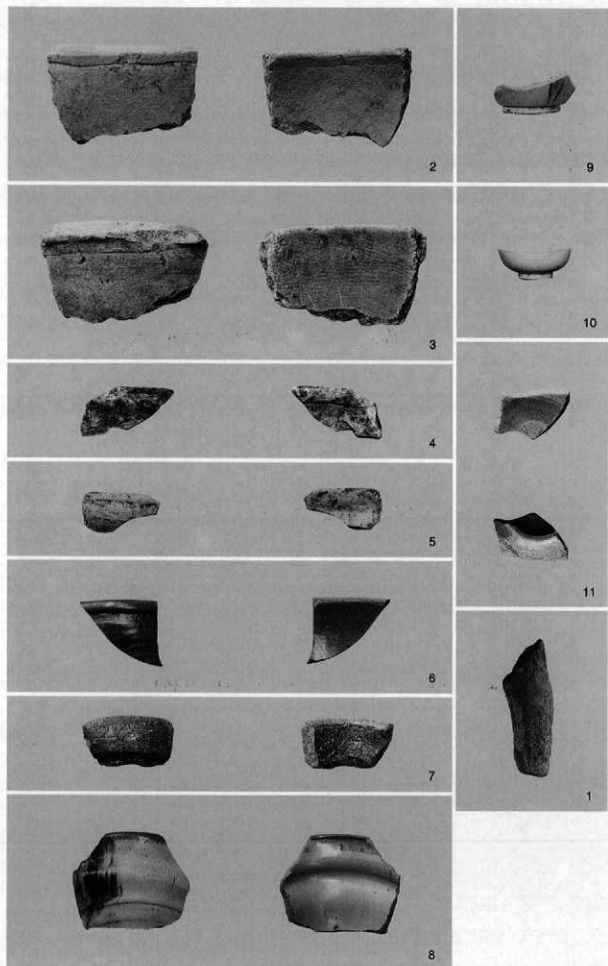
SK119翼状剥片出土状況（東より）



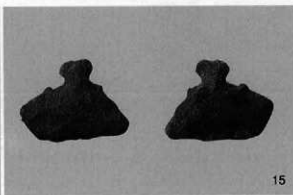
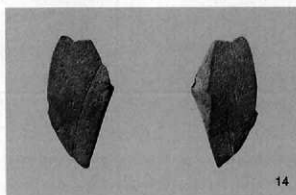
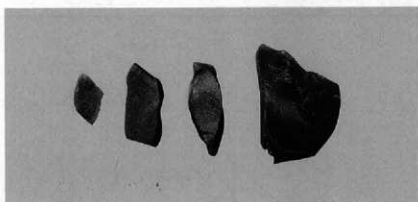
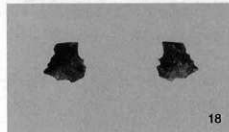
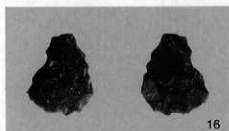
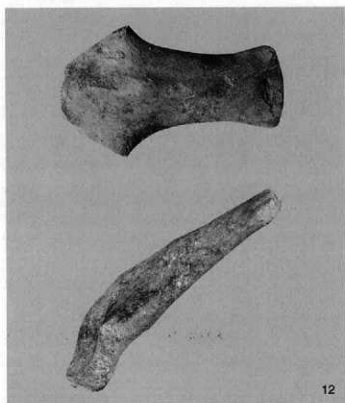
SD103遺物出土状況（南東より）

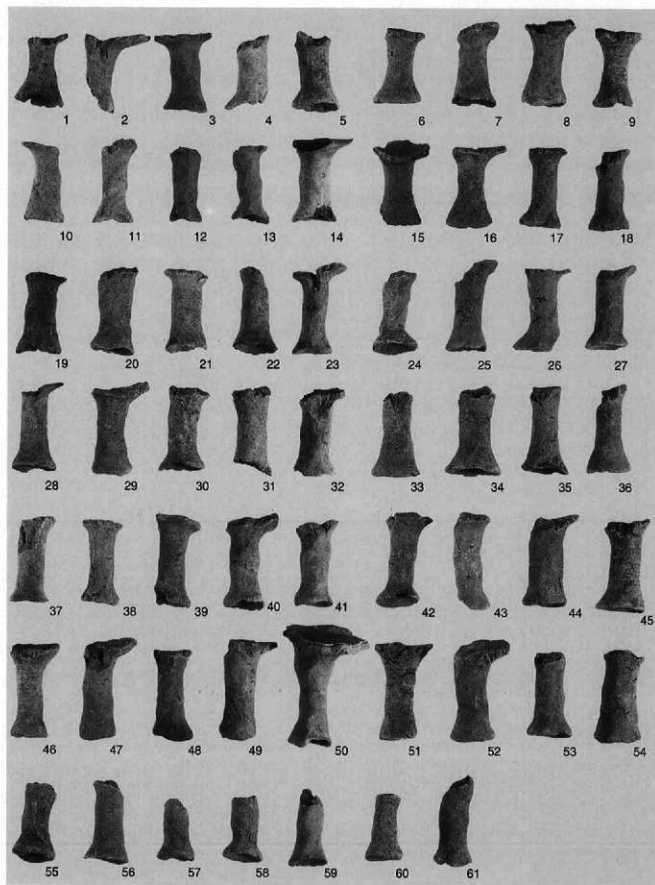


SD103土鍾出土状況（南東より）









秋徳町内出土の製塩土器

## 報告書抄録

ふりがな	なかつばらいせき
書名	中津原遺跡
副書名	特別養護老人ホーム造成工事に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第15集
編集著者名	大村秀典 福本和久
編集機関	財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2000年3月10日（平成12年3月10日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかつばらいせき 中津原遺跡	やまぐちけんよしあきぐん 山口県吉敷郡 あきおちょう 秋徳町東 あつばらいせき 字中津原	35401		34°04'	131°25'5"	19990419 ? 19990731	3,400	特別養護老人ホーム造成工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中津原遺跡	集落跡	江戸	掘立柱建物跡 礎石建物跡 土坑 溝状遺構 水溜遺構	土師器 弥生土器 瓦質土器 陶磁器 石器	山口県内では4例目となる約2万年前の翼状刺片（旧石器）が出土

---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第15集

## 中津原遺跡

—特別養護老人ホーム造成工事に伴う発掘調査報告—

2000年3月

編集・発行 財団法人 山口県教育財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口市春日町3番22号  
印刷 泉菊印刷株式会社  
下関市長府扇町8番48号

---